

# 守護神 ゴーレス

第4話

『パンとサーカス』

PROTOTYPE-ZERO

作:みかつきなお

守護神ゴーレス第4話

『パンとサーカス』 Prototype-Zero

東の空は薄曇りで夜明けは紫から白へと空の色を変えていた。

舜は一番早く起きた。酔いつぶれた面々と普通に就寝した面々はまだ和室で男女入り混じつてごろ寝をしている。

ゴーレス製作にあてた一年間、手作りのこの工場の組み立てからゴーレス本体の製造、そしてコントロールームの中核である擬似生体CPU「ウムイ」の開発設計、それらの完成までこの面々で行って来たのだ。すべての計画の区切りとして無事起動し動いたゴーレスを見た彼らは満足の眼に就いていたのであった。

……これからなんだな。舜は満足の気持ちを次の目標に向けて考え始めた。

モニター上に新しいメールを見つけた。辰巳の主催するハッカー集団「エニグマ社中」からのメールだつた。

エニグマ社中総長へ 副長より

リーダーよ。おはよう。お宅の起動実験は成功したようだが、桐丸の新型がえらい大捕り物だったらしい。あのリードマンSG-II-3は化けモンだぜ。あの社長は狂つてるよ。アクチュエーターの歴史は変わったな。でもゴーレスさんの実力を見ないと俺もなんともいえないけどね。とりあえず早くこの桐丸のプロッパーなやけにかつこええ動画みてみい。じゃあね。

舜は添付されたリンクを開いて動画を見た。  
桐丸重工公式ファンサイト上の動画は黒い海中から始まつた。

イヒカ搭載カメラはソナーで捕らえたエビ型アクチュエーター、アラスカ17の姿を白黒の仮想画像として表示した。

イヒカを振り切るようにはげるアラスカ17。追跡するイヒカは再びアラスカ17に急接近し、背中を捕まえて海上に浮上した。

ここでカメラは海上の運搬船からのカメラに切り替わる。サーチライトが組み合つている2機のボディーを照らし出す。

赤を基調としたアラスカ17の大きなハサミが背部のイヒカを払いのけて、容赦なくイヒカにパンチを繰り出す。しかしイヒカはアラスカ17の尾びれの裏側のスクリューを破壊した。

抵抗するアラスカ17は腹に付いた10本の小マジックハンドでイヒカの右腕を捕まえて握り込むが、イヒカは水中から飛び上がり、アラスカ17は右手を外した。

イヒカはアラスカ17の尾びれと腹部に投網を打ち込んで行動の自由を奪つた。

生け捕り状態のアラスカ17は運搬船に曳航されて、桐丸本社のある浦添埠頭へと向かった。動画は10分ほどで終わった。

動画の閲覧を終えた舜はシユミレーターの電源をつけた。

迫力ある戦闘に舜は衝動に駆られた。  
舜はヘッドセットを装着し、シユミレーターの座席に座り、OSを起動させた。本物の「クビットより小さなモニター画面にOSの「Mythological Actuator」の文字を確認すると胸が高鳴つてきた。

「いくぞカーレス！　俺は桐丸よううまくアクチュエー

ターを動かしてみせる。あんな派手な二代目ボンボン社長の会社よりいい仕事してやる！　Go　ダイブイン！」  
水中活動に画面をセレクトしてゴーレスの操縦桿を握つた。

「心の中の海を泳ぐよう……　心の中の海……。」

同一速度の潜行をだんだん深度を上げて一気に潜行限界の300mに設定した。

各部関節アクチュエーターへの負荷を示すアラートがなり続けた。

「もつと深く。ギリギリを見せてくれ！　ゴーレス。」アラート音と画面に緊急用メッセージと音声ガイドナンスが現れた。

「機体の運動性能低下。生命の危険があります。シユミレーションの終了を推奨します。」

「まだだ。根性で機体の限界を……。」

「止めろコラ！」辰巳が座席の後ろから丸めた新聞紙で舜の頭をたたいた。

「あーあ。舜また暴走だよ。」

裕一が起きてきた。  
「すみません。今届いた桐丸の画像がすぐくて……。」

辰巳は呆れていた。

「お前、これはゲームじゃないんだ。仮想プログラムも

ゴーレスと同じホストコンピューター『ウムイ』の力が使われている。ゴーレスとウムイはまだ未知の力を秘めている。心身に影響を与えることはお前も前の実験でわかつているだろう。」

「わかつてます。」

いく感覺。ゴーレスの体と繋がる感覺。それが普通な感覺になるんです。」

「非日常が普通の感覺を麻痺してしまうと駄目なんだ。海で泳いでいたらいつの間にか沖に流されて帰れなくなるようなもの。自分を常に外から見る訓練をしろ。それに似ている。気をつける。」

モニターのウインドウで再生されているイヒカとアラスカの格闘の画像に気がついた辰巳は無言でメインモニターに再生させた。

「すごい……いや、桐丸のやつらやりやがったな。舜、みんな起して。これは見なきやいけないな。」

……もう、自分勝手なんだから。僕はちゃんとやりたい気持ちでいっぱいいっぱいなんだ……。そんな気持ちをこらえながらみんなを起こしに行く舜であった。

「辰巳さん舜が思わずショミレーターでやりたくなるの

わかるな。これを超えたいと思うよな。」

裕一はにやけ顔が止まらなかつた。

「しかし起きたばかりの事件を公開する桐丸重工、今日の新作発表会を祭にするつもりだな。」

「俺達の正式発表は来週。これから忙しくなります

よ。」

「俺達の正式発表は来週。これから忙しくなります

浦添市西州（いりしま）の浦添埠頭を見下ろす黒いビル、

桐丸重工本社ビル37階の社長室では兼光社長と、歯獲

（ろかく）されたアラスカ17のパイロットがテーブルで向かい合いながら会食を行っていた。入り口近くのデスクでは端末に向かうワインレッド地のベレー帽にベストの桐丸重工制服の女性、そして黒服の大柄の男が3名、パイロットの男の後ろに2人、社長の後ろに1人立っていた。壁の大型モニターには今日の深夜の戦闘映像が公開されたサイトの下ウインドウに書き込みが右から左に流れるように続々と表示されていた。

「いいねえ、ファンもアンチもこれだけ騒いでいる。大衆はパンとサーカスを欲している。与えた分以上の大衆の投資が我々に帰ってくる。」

男は社長の後ろの黒いスーツのSと顔をあわせないよ

うに兼光をにらんだ。

「兼光さんはローマ皇帝かよ。スタジアムで自ら剣闘士として戦つたクレイジーな皇帝がいたらしいがあんたはまさしくそれだ。

結局俺はあんたの引き立て役。同じ見世物になるなら上

海かムンバイのアクトファイトスタジアムでファイトマネーを賭けて戦うほうがマシだ。」

ヒッピー崩れのラフな格好のワンワールドメンバーとは違い、カーキ色の合皮レザーのバイロットスーツにスポーツ刈りの短髪の男はスペシャリストとしての落ち着いた空気を漂わせていた。

「勇敢なグラディエーターの君に対し僕も最大の敬意は払っている。君の身柄は保証済みだ。海保にも君の組織にも話を通すことができた。被害届けを出さずに当事者と和解、接触事故レベルに終わっちゃったわけね。うちはそもそもワンワールドがロシア軍から奪つたものを取り返したわけだ。チューインガムしてロシアに返還。もとの鞘に収まるわけだ。我々がすべてを丸く收めていることに不満はあるかね。」

「ふん、政治圧力を使つたな。俺をどうする気だ。ワンワールドはなんと言つてきたか。」

「元広域自衛隊第1アクチュエーター機動中隊所属 荘田広継（えだひろつぐ）一尉。向こうさんは手のひらを返してお前さんのことはどうでもいいということだ。」

「覚悟の上で。俺は捕虜だ。好きにしろ。」

「まあまあ、悪いようにはしない。貴君の動きでわかつたよ、君は戦闘のプロだ。私の機体を破壊することもいとわなかつた。ハザラスタン紛争に紅海危機、自衛隊の海外

派遣での対テロ戦闘に君はかかわっている。桐丸・橋製作所のアクターを使いこなし自衛隊史上でもっとも戦果を上げたエースである君がいまではこんなヤクザな仕事とはもつたいない。

君は牛若丸に負けた弁慶、向こうさんより我が社のテストバイロットにならないか？ カタギの会社の方がいいだろ。」

自衛隊での過去の経験を勝手に調べられた荏田はコーヒーを手に苦笑いをした。

「戦果なんてこの国でまともに報道されているかね。被害もだ。閣僚が頭を下げる映像だけが国民に報道されるんだ。この国で裏家業扱いの戦争屋の俺が桐丸さんにいまさら入社なんて虫のいい話は少し考えさせてくれ。」

「貴君と僕は戦友だ。君の憤りはわかるよ。この国を変

えるのは実体としてあるアクチュエーターの圧倒的パワー

だ。文より武だ。だからこそ君の力をうちで使いたいものだ。」

この男は本当に理解しているのか？ これはビジネスじゃねえ、まるで子供の直感で動いている。荏田は諦めの心境で兼光に調子を合わせるつもりでいた。

「まあな。しかし、リザードマンの新型は画期的だな。これはオイルまみれのアクチュエーターの匂いじゃねえ、血が通っているようだ。型番とか変えたほうがよくないか。」

「プロトタイプゼロ・イヒカ。これが本当の名前、試作機零号だ。次号機より次世代機として再スタートだ。」

「よほど思い入れがあるんだな。」

「これはわが社の歴史上約束された機体だ。自動機械の数千年の歴史上、蓄積されたテクノロジーの集大成だ。」

「数千年？ からくり人形とかも含むのか。」

「そう。世に出たものなんてごく一部。皆が知りえた歴史なんてごく一部だよ。」「そんなもんかねえ。」

俺を相手に講釈しても仕方ないだろ。もっと重要なことを話さないのか。荏田が苛立ちを感じたところで、モニタ画面の画像が切り替わった。

第一秘書橋桐江の顔が現れた。

「おはようございます。そろそろ今日の発表会のミーティングですが、公開した画像を見ておもちゃメーカーがゲーム関連企業からさっそくオファーがかかつてます。御確認をお願いします。」

「了解了解、さつそくちらは人気者だねえ。じゃ荏田君、俺出るけどくわしくはこちらの城間さんに聞いてね。んじやまたね。」

「社長いってらっしゃいませ。」

若い秘書はドアを開き社長を見送った。部屋を出る兼光の後ろ姿を荏田は睨んでいた。

荏田の冷たい眼差しに思わず目を合わせてしまつた城間は一瞬たじろいだ。

「あ、あの……秘書課の城間貴子です……。よろしくお願いします。」

荏田は目をそらして視線を落とした。そしてわだかまつた思いを吐き出した。

「だれか気がついたか？ 俺は日本の防衛上の危機を俺

は起こしたんだ。潜水アクチュエーター単機で日本沿岸に侵攻することが可能などを露呈されたんだ。この国は危機感がないのか。本物の戦場を知らない大衆の戦争ごっこ

に俺は一生付き合うしかないのか。戦場に散った仲間達は機械の部品でしかないのか。まったく狂っている。警告するよ、あの連中はまたやつてくる。」

問題の映像を見終えた百名の一団は朝食をすませて解散した。今は百名ビーチの工場にいるのは裕一とみずき、舜、小夜子の4人だった。彼らは今日の作業予定、先日の動作データから導かれた数値を元にして、さらに精度を高

くして関節部アクチュエーターの負荷を動作させずに与える実験を続けた。端末に向かう3人とゴーレス内部の舜。本番さながらのリハーサルが続いた。

今日はすべての指揮を裕一に一任した辰巳と小雪の二人は百名に程近い新原ビーチの「海のカフェ」でランチを取っていたが、辰巳はハムサンドを片手に数値データのプリントに目を通していった。

「もう、食事の時くらいゴーレスのことを忘れてよ。」

「ゴーレスの運動性能の限界を確かめて桐丸の新型との差別化をしなくては……。」

「だから勝ち負けじゃないって結論だつたでしょ。さつきみんなで決めたでしょ、うちはうちつて。葦原茂敏の設計図に忠実かつ実用にたるアレンジ。初心を忘れたらだめ

でしょ。」

「ああ、すまん。桐丸のプロジェクトをやめてゴーレスを作ることにした時から戦いのつもりでいた。俺達がこの世界に残るためににはゴーレスを運用した大型開発への参入、そして2号機の開発、考えることが多いよ。」

「それも後で考えましょう。でも今日の起動実験あの3人だけで大丈夫なの？ 舜はさつきみたいに暴走しない？」

「俺がいなくても裕一が舜の暴走を止められなければ本当の組織にはなれないよ。裕一、みずき、舜には見えないものを見る力がある。彼らに本当に一任できなければ、これは会社ではなくてただのサークル活動だ。大丈夫、今日は問題ない。」

「これからしばらく私達忙しくなる。だからちょっとと仕事を忘れてフラフラしたいな……。」

小雪は辰巳をじっと見つめた。

「わかった。じゃ近場を軽くぶらっとね……。」

カフェを出ようとした二人は久しぶりに出会う人物を見た。

デニムの開襟シャツにカーキのジーンズ。伸ばしつばなしの髪をゴムでまとめただけの化粧つ氣のない伏目がちな

おとなしい女性。

「桜さん……。」

「工場に一度行つてみたけどここだと言われて。今日は二人にお話したいことがあるの。」

カフェの横から石段を降りて、砂浜へと降りた三人は岩影の海辺のベンチで久しぶりに対話することとなつた。以前とは違う桜の様子に小雪と辰巳は何かを感じた。

「桜ちゃん真剣なお話かな。」

「ええ、真剣。1年ぶりだというのにこんな話からしなければならないのは残念だけど……。」

「急いで話さなくてはならないの。ついさっきからサイトで炎上している。そちらのアクチュエーターを撮影した動画。」

桜はタブレット端末を開いた。サイト上には昨日ゴーレスが砂浜で動いている姿が映っていた。

「二人は顔を見合わせた。」

「見られる事は予想したけどね。いずれ公開するものだし。」

「撮られた以上、一般公開の予定を変更しなければ……。」

「本題はそこじゃない。辰巳さん、小雪ちゃん、あなた方

の中に『能力者』がいるということ。」

「二人はしばらくだまつた。」

「言えないことはわかっている。でもうちの研究所のテクノロジーで脳波の動きを感じできることは小雪は推測できただでしょ。」

「お互い仕事の話はしない約束だったでしょ。見なかつたことにはできないのかしら。」

「世界のある一例のお話ね。今年初め、モンゴルの首都ウランバートルの子供たちが20名失踪した。でもうち8名は無事帰ってきた。彼らの証言によると病院のような大型トラックで検査をうけたあとすぐ帰されたという。残り2名は帰つてこなかつた。こんな事例が世界中で頻発している。」

その検査は能力の適正検査。素質のあるものはある組織にハントティングされるというシナリオが噂されている。そこにはトロイア・プリマスグループの国際流通企業ユニオンカーゴが絡んでいる。途上国支援の裏の顔よ。我々はあなたの方を支援、保護する用意がある。そのことを伝えたかったの。」

「ちよつと待つて。簡単には信じられないし、どれだけこのことを研究所が知りえたのか情報がほしい。そうしない

とこちらも教えられない。ごめん桜ちゃん。」

「わたしはあなたを助けたい。その気持ちなのに。」

向かい合う二人の間から海を見た辰巳は水平線の上に立ち上がる水しぶきを見た。

「ちょっと見てみろ、何だろう。クジラ？」

そしてもう一回海岸近くで水柱があがつた。そしてこの3人と新原ビーチでウインドサーフィンをしている若者たちが岩礁の上に見えたその実体をはつきり目視した。

「大型アクチュエーターだ！」

沖合いに見えたものは魚類を基本型とした流線型ボディに4本の腕部と脚部と尾びれで岩礁に立ち上がる揚陸型水中アクチュエーターであった。

「あ、あれは米海兵隊配備のトロイ＝プリマス社 ポーツマス6かよ！ 通称ナポレオンだ。」

「型番はどうでもいいでしょ、なんでここに……。米軍の演習？」

辰巳はナポレオンがどんどん左へ進んでいくことに気がついた。

「おい、あいつの進行方向、左は百名方向だろ。うちの工場が危ない！」

3人は駐車場に急いでいった。

「桜さん。とりあえずうちの工場に来ててくれ。それから話を続けよう。なあ小雪、桜さんは君と僕の友達だ。」

「わかった。どこまでお互い協力できるかわからない。でも来て、桜ちゃん。」

「わかりました。とにかく急ぎましょう。」

小雪は電話をかけた。

「裕一くん、大変、軍用アクチュエーターが接近。まさかワンワールドかもしれない。監視モニターに映っているはず。まずは確認をおねがい。」

起動実験中の裕一はコントロールルームで豆鉄砲をくらった。

「まさかやー！ みんな、でーじなどーん！ ちやーすがやー！ （みんな、大変なことになつた。どうしよう。）」

「にーにー、ひんぎる（逃げる）用意よ！」

荷物をまとめる小夜子と頭を抱える裕一にみずきが一喝した。

「みんな！ 落ち着いて。まず、ワンワールドならネットに犯行声明を出すはず。そしてここを出ないで済むことなら出ないほうがいい。状況を判断しましょう。早く。」

「そうだな。わかった。」

椅子の上で中腰だった裕一は腰を下ろし、コクピットの舜に指示した。

「いま小雪さんから連絡があつたとおりだ。モニターに映つた状態だ。こいつの目的がわからない限り絶対動くな。これがミッションコントロールからの指示だ。」

舜はしだいに近づいてくる灰色の機体を確認した。

「わかった。もしここに突入しそうなら？」

「俺が出ていって交渉する。」

「もし裕一が狙われそうになつたら。」

「そんなことはない……はずよ。」

「僕はゴーレスで戦う！」

「えーひやー待て、それは最後の手段どー！」

犯行声明を探していた小夜子がHPを見つけた。

「あつたよー、ワンワールドジャパンのHP、<桐丸重工の下請け企業、沖縄県南城市の工場のアクチュエーターをいただく。>……だって、うちちは下請けじゃないのにー。」

「あつたー（あいつら）なんでここでアクチュエーター作つてるってわかつたばー？　どこでハッキングしたんだ？　でもなんで来るんかー？」

運転している辰巳の横顔が助手席から映されたライブフロンターミナルのモニターに映った。

「おい、裕一、いまエニグマ社中でやつの機体の通信回線へハッキングを試みている。機体情報からたどつて使用者をハッキングを試みている。機体情報からたどつて使用しているサーバーを突き止める。向こうがだんまりを決め込んでも数分以内にパイロットにアクセスできるはずだ。交渉で解決する方法を考えよう。絶対にお願いだ。舜を暴走させるな。いざ動くとしても正当防衛だけは守れ！　強制終了でシステムに重大な障害が残つてもだ。絶対だぞ。いいな。あと1分で着く。よろしく。」

「了解。」

あらためて裕一はコクピットの舜につないだ。

「舜、正当防衛。お前ができなければホストから強制終了をかける。俺の指示に従えよ。」

「わかった。では向こうの掘削用ドリルガンを準備しておくよ。」

足を曲げて鎮座するゴーレスから5mほど離れたところに掘削ドリルなどオプションパーツが並んでいた。

「おめえわかつてねえだろー。一步でも手を動かして取るなよー。」

百名の工場まで数百メートルの位置にナポレオンは見えて

來た。

「小夜子、警察はどうだ。」

「『同様の通報を受けました。逃げてください。』だつて。言うより早くこっちこいって。」

「佐敷の南城署にはバトカーしかないし、那霸署の大型も何十分かかるかわからんし、そもそも警察の作業用に毛が生えた機体じゃ軍用に対抗できないよ。いざという時はゴーレスしかいない。」

みずきはデスクから立ち上がり、ゴーレスの横を通りすぎた。

「あれ、みずきどこ行くの。」

「女の子が立っていればここは襲われない。」

「ああ、馬鹿馬鹿、待てみずき、コラ！」

「兄貴はうごくな、私が止める。」

「お前も行くな。」

シヤッター脇のドアからそとに出たみずきは仁王立ちに足を広げて砂浜に立つた。

落ち着いた表情の裏で、みずきは悪くていやな気配が脳裏を掠めていくことに耐えられなかつた。

そんな中みずきの心にもう一人の自分が現れた。白い装束の古代神官の若い女性。

〈初めての戦いだな。お前はどうしたいのだ。〉

「私はなにかをあきらめたくない。そして悪意を乗り越えたい。」

〈悪意の潮流に飲まれるな。悪意は一つではない。いくつもの流れに気をつける。〉

「もう一人の『私』よ。私はここから逃げない、力を信じる。」

その言葉に導かれたみずきはナポレオンに指を指した。すると海岸沿い右手200m先のナポレオンは歩みを止めた。

「なんか止まつたねえ……。でもみずきお前何を考えてる！」

みずきがヘッドセットのマイクで裕一に言った。

「裕一、怒鳴つてばかりじやだめ。あなたのできることをやつて。戦場で出会つた私達の祖父はその心と『力』で生き残つた。」

「ああそうだな、俺達には力がある。見えないものが見える。舜、深呼吸してるとか。」

「うん……。焦つてはいけないね。」

内心は不安でどうしようもなかつた舜は言われたことに同意するしかなかつた。

攻撃してきたら。どうする。どこまでが正当防衛?  
裕一やみずきに質問したかったが彼は気持ちを押し殺し  
た。

づく